

北鎌倉の切支丹遺物

切支丹遺物は、東慶寺の聖餅箱と光照寺のクルス門、南蛮風燭台が有名です。国の重要文化財である東慶寺の聖餅箱は昭和十一年に東京国立博物館の美術課職員が寺で所蔵品を調べている時に発見しました。寺には何も記録がなくいつ持込まれたのか不明だそうです。神父がミサの執行で使う重要な祭器であるこの聖餅箱のフタに描かれているIHSは、イエズス会を表していると言われています。

光照寺には中川クルス紋と言われる紋章を掲げた山門、本堂には影が十字となる南蛮風の燭台がありますが、両方とも明治五年に廃寺となった台の東溪院から移したものです。(東溪院は一六八〇年に九州大分の大名中川久清が娘の供養のために建てた寺です。)しかし光照寺も切支丹と無関係ではなく、寺の檀家の中に切支丹の子孫がいた事を古文書で確認できます。また寺には切支丹の子孫との関わりを示す話も伝えられているそうです。そして光照寺と東慶寺だけに、気付いている方がほとんどいないのかあまり知られていませんが、切支丹灯籠と呼ばれている織部灯籠が一基ずつあります。両寺ともひっそりと目立たない所に立てられています。

この他の社寺では、浄智寺の本堂の後ろに聖母マリア像としか思えないような石像があります。寺の人は「子抱き観音像」と苦笑いしながら言っていました。